

未来を創る としまコミュニティ大学の学び

としまコミュニティ大学のゼミには積極的に学ぶ受講生たちが多く、各ゼミの活動は非常に充実している。そのゼミを担当する3名の講師で令和4年度のゼミの学びを振り返り、多文化共生をキーワードとして、経済学、日本語教育、人間学のそれぞれの視点から学びの成果を語りあった。



社長俊 (北海道大学准教授)

郭洋春 (立教大学教授)

佐藤社広 (山梨学院大学特任准教授・立教大学兼任講師)

各ゼミの学び

郭洋春ゼミ

2016年のゼミ開講以来、豊島区の地域活性化を視野に入れた「としまブランド」の商品開発アイデアを考え、その実現プランを練るという実践的な講座を継続中。最新刊『100均資本主義 脱成長社会～「幸せな暮らし」のつかみ方』(プレジデント社)の知見もまじえ、ゼミ生とともに現在の資本主義の分析とそれに基づく新しい資本主義の可能性を探っている。

社長俊ゼミ

地域で暮らす外国人のための日本語教室「としま・ほんご・フレンズ」を、としまコミュニティ大学の修了生たちとともに立ち上げた。ゼミでは、「やさしい日本語」を使って日本人と外国人が円滑なコミュニケーションをとるための実践と、そのためのスキルアップを図る。受講生たちは、外国人がより生活しやすい日本語の表記や会話のポイントを学んでいる。

佐藤社広ゼミ

「情報リテラシーを鍛えるための多読・精読・乱読」をゼミ活動の中心に据え、事実の捉え方(ファクトフルネス)、外国人居住者の生活権(多文化共生社会)、ウクライナ問題(戦争回避と平和実現)など時代のなかで視点と思考を深めるゼミを展開。アクティブ・ラーニングの方法を取り入れ、主体的に学ぶ「マナビト」を増やすこともゼミの大きな目的としている。

新しい資本主義のあり方と多文化共生社会の学び～これからのゼミの展望～

郭: この30年間は、低賃金、低成長の時代と言われてきました。しかし日本社会では激しいデモや政権交代があるわけでもなく、人々は淡々と暮らしています。それを可能にしているのは、身の丈に合う暮らしの工夫や脱成長志向という新しい資本主義社会のあり方だと考えています。100円ショップの興隆はその象徴的な現象です。それは「100均資本主義」と言える、新しい日本の経済社会のかたちを示しています。

佐藤: 20年ほど前に、堀内圭子『快樂消費する社会～消費者が求めているものは何か』(中公新書、2004)という本を読みました。そこには、個人が自分へのご褒美のためにモノやコトを消費する快樂消費の時代が来るという指摘がありました。郭先生のおっしゃる「100均資本主義」も、身の丈に合う現実に即した消費活動の楽しみを基盤とするものだと思えます。

社: 経済の話からは少し離れるかもしれませんが、グローバル化ともなって消費活動も個人化・私事化してくると、人は周りのことよりもまず自分ファーストになります。これは、大衆消費社会と多文化共生社会との関わりという話になりますね。自分が日本に留学して驚いたことは、日本には多くの外国人がいるけれども日本人にはその自覚がないという点です。日本人と友だちになるような場所や機会が少ないため、そのような場づくりのひとつとして日本語教室を始めました。

佐藤: 郭先生がおっしゃるように、身の丈そして Do It Yourself のいわば DIY 消費が主になっていくことが日本の新しい資本主義の方向としてあると思います。また社先生が示唆するように、DIY 消費をどう個人から社会、身の周りにいる外国人へと関わらせていくかということが、多文化共生時代の課題でもありますね。

郭: 豊島区・池袋には、たくさんのお店があります。安くて美味しいお店を探してゼミ生と食べ歩きをしつつ、店主の話も聞いて交流し、店にやってくる外国人と歓談することも、大切な学びの機会ですね。2023年度のゼミではそのような活動も積極的に進め、多文化共生社会での学びを充実させ、お腹も満たしていきたいと考えています。

社: 日本語を教える・学ぶという関係は、言葉を通じた異文化交流にほかなりません。受講生同士でお互いの話を聴き合うことを重ね、それをコミュニケーションの架け橋としていくことを、2023年度の目標にしたいと考えています。受講生のライフストーリーの共有ですね。

佐藤: 多様性、ダイバーシティが大切と言われています。それを実現するには「やさしさ」という行動理念が必要なのですが、2023年度のゼミはこの「やさしさ」について、掘り下げます。心持がやさしいだけでは「やさしさ」ではなく、何らかの結果をともなってこそ「やさしさ」だということを学びあうゼミを予定しています。

多文化共生社会の実現には、日本人同士はもちろんのこと、生活・文化を通じた外国人との交流の場づくりが、まず大切である。3つのゼミでは引き続き、それぞれのアプローチで交流と学びの場づくりに取り組む。としまコミュニティ大学の未来の学びは、このようにして創られていく。

SDGs 未来都市豊島区

豊島区は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。



発行日：令和5年3月

発行：豊島区文化商工部 学習・スポーツ課
〒171-8422 豊島区南池袋2-45-1
TEL 03-4566-2762



はじめに

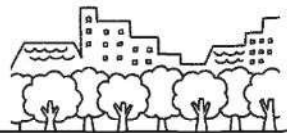
豊島区では区民の生涯学習を推進するため、区内7大学と協働して講座を実施している「としまコミュニティ大学」など、社会の変化や多様なニーズに対応した学習機会を提供しています。

令和4年度(2022年度)も、としまコミュニティ大学は新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、すべての大学で大学開催の講座とはなりませんでしたが、昨年度と同様、区施設での講座実施やオンライン会議システム「Zoom」を活用してハイブリッド形式で授業を行った講座も多くありました。今回、学びの事例として紹介するのは、いずれも「Zoom」を使い、会場で受講できない状況にあっても学びの場に参加できるよう運営した講座です。

今年度、ゼミでの学びあいで意識したのは「多文化共生社会」。豊島区は、総人口に占める外国籍等区民の割合が高いという特徴があります。地域社会の構成員として、多文化共生について考え、その学びの成果を共有し、地域課題として引き続き次年度の学びに活かしていきます。



としま コミュニティ大学 マナビトゼミ



としまコミュニティ大学では、2年間登録をして学ぶことのできる「マナビト生」制度を導入しています。受講生同士が学びを通じてゆるやかにつながり、豊島区の地域性や資源を活かして課題に向きあい、継続的な学びによって地域の課題解決や地域づくりに取り組むことができる制度です。多様な学習ニーズを持った人々がゼミで学びあうことで、学んだ成果を地域へ還元し、豊島区の魅力を発信しています。

Contents



p 01 はじめに／もくじ

p 02-03 **1** 「多文化共生について学ぶ—日本社会で暮らす外国人のライフストーリーを聞く」
多文化共生について学ぶ、外国人の魅力を引き出す、多様性について再考する

p 04 **2** 「多文化共生とことば ～やさしい日本語、日本社会へ」
自分の生活や人生に活かしていくための学び

p 05 **3** 「読みを深める“この本カフェ”～いま、戦争を考える」
今、世界で起きていることを多角的な視点で捉える

p 06 多文化共生社会をキーワードとした受講生の声

p 07 未来を創るとしまコミュニティ大学の学び



1

令和4年度講座

「多文化共生について学ぶ

—日本社会で暮らす外国人のライフストーリーを聞く」



多文化共生について学ぶ、外国人の魅力を引き出す、多様性について再考する

杜 長俊

▶ 外国人の私と、としまコミュニティ大学の出会い

2022年は私の人生の大きな分岐点となりました。仕事の関係で拠点を東京から札幌に移しましたが、引き続きとしまコミュニティ大学で多文化共生について学ぶ講座を担当することが決まっていた。一度は講座を辞退しようとも考えました。しかし多文化共生に携わる外国人の私が、そして、大学生や留学生の若い世代しか教えた経験がない私が、社会経験の豊富な社会人とともに多文化共生について考えることは、きっと大きい学びになるのだと確信し、講座の担当を決めました。このコラムでは、外国人講師の私が「多文化共生について学ぶ—日本社会で暮らす外国人のライフストーリーを聞く」(全6回)という講座の内容を振り返るとともに、講座で意識したことや、受講生とのやりとりの中で感じたことをお伝えします。



▶ 多文化共生について学ぶ講座

1 当たり前を見直す

講座の中で、最も意識したのは、当たり前のことを見直すことです。自分にとって当たり前だけど、他者にとって当たり前ではないことに気づく機会を、講座の活動の中に組み込むよう工夫しました。例えば、ゴミ捨てのルールや生活音に関する注意書きについて、外国人に説明するケースを扱いましたが、ルールや注意点を外国人の母語に訳せばいいということではなく、**外国人の国や文化の中でそれらのことが当たり前ではないことを踏まえた説明**を考える必要性に気づく人が多くいました。



2 相互理解を深める

講座の各回では、様々な話題や状況について、**受講生が自分の意見や感想をグループで伝え合う活動**を行いました。1人1人が順番に自分の意見を発表しましたが、それぞれの意見について静かに聞くという話し合いのスタイルに違和感を抱きました。その後、進行役、まとめ役の役割を導入したり、相手の意見に対して理解や共感を示す反応や、疑問を感じた時に質問するなど、聞き手の行動を促したりしました。すると、受講生同士の間に意見交換や学びあいが深まる頻度が増えました。相互理解を深める技術は、外国人との会話だけではなく、受講生同士の話し合いの活動の中で培われているのではないかと、講座を振り返って思いました。



▶ 講座の印象的な活動

1 外国人のライフストーリーを聞く

講座の4回目(12月17日)に、豊島区のボランティアで運営をしている日本語教室(としま・にほんご・フレンズ)で日本語を勉強する外国籍住民がゲストとして講座に来てくれました。受講生がペアになって外国籍住民に「過去、現在、未来」の話を聞きました。中でも**日本での暮らしに関する話**が最も印象的でした。子育てや仕事をきっかけに日本での生活が徐々に豊かになっていくエピソードや、日本人とのやり取りの中で難しさを感じた理由などが受講生によって引き出されました。また、話す機会がなく教科書を暗記し日本語を習得した人もいれば、日本人との会話の中で日本語の単語を覚えた人もいるというように、**日本語学習に関する事情の違い**も話題となりました。この活動は、「外国人」に対する**思い込みや偏見をひっくり返すような体験談**に耳を傾け、話を掘り下げることによって、初対面にもかかわらず、外国籍住民の魅力や個性を引き出すことができているように感じました。

2 ポスター発表

講座の5回目(1月21日)に、前回聴き取った**外国人のライフストーリーの内容をポスター(模造紙)にまとめ、自分の言葉で説明し、聴衆と意見交換を行う活動**をしました。聴衆は、4回目にゲストで来た外国籍住民と、同じとしまコミュニティ大学のゼミで多文化共生を学ぶ佐藤先生の講座の受講生が参加してくれました。ポスターには、外国人のライフストーリーの内容だけではなく、外国人とのやりとりについての感想も書いてありました。**受講生がそれぞれ違う側面に着目していることが、私にとって非常に興味深い点**です。「**コミュニケーションは、分かりあうための手段ではなく、分からなくても相手を受け入れ共にあるための技法**」という情報学者の言葉を引用し、自分の実践を理論的に見つけている人、「世間」と「社会」の違いに注目し、利害関係のために社会の外側の人間に無関心になりがちという気づきを取り上げる人、自分の好きな事柄から人とのつながりを見つけ人生を楽しむことも必要だと、生き方について考えを深める人などもありました。「実践」→「振り返り」→「振り返りの言語化(他者との対話)」という循環で、実践の質を高めていくプロセスを、受講生がしっかりと体現していたと思います。



ポスター発表



ポスター発表後の話し合い

多文化共生に携わる人材を育成するという講座の目標に沿って言えば、この活動は、私を含め講座のメンバーにとって、「多様性」について深く掘り下げ、「多様性」に対する態度や向き合い方について再考するきっかけにもなりました。他者との違う部分としての「多様性」が注目されがちですが、他者とのやりとりの中で、自分の中にある多様性を見つけて、自分は何者なのかと考えることも大事であることに気づきました。「どうして日本へ？」と聞かれる時、私はしばしば「自分探しの旅」と答えたりします。講座で学びあう皆さんと出会い、多様性とは何か、私は何者かについて再考できて、次へ進む勇気をいただきました。

文責/担当講師 社長俊 (と ちょうしゅん)

北海道大学高等教育推進機構准教授。筑波大学グローバル・コミュニケーション教育センター非常勤講師(2015年~2020年)。外国人のための日本語教育と、多文化共生社会に携わる人材の育成に取り組む。台湾出身。日本居住歴16年。



2

令和4年度講座

「多文化共生とことば ~やさしい日本語、日本社会へ」



自分の生活や人生に活かしていくための学び

佐藤 壮広

▶ 講座のねらい

「多文化共生」という理念を
ことばとコミュニケーションの現場から考えること

令和4年度の「多文化共生とことば ~やさしい日本語、日本社会へ」講座のねらいは、「多文化共生」という理念をことばと**コミュニケーションの現場から考えること**とした。豊島区は居住者の1割が外国籍であり、多文化共生の現場のひとつである。だが現実には、生活上で外国人と接するのはコンビニエンスストアや飲食店などに限られ、友だちづきあいや隣近所のような交流をすることは少ない。日本政府は政策として「移民」の受け入れは是認していないが、日本は世界の中でも外国籍の居住者の多い国の一つである。「郷に入っては郷に従え」という考えを是とすれば、外国人の労働者や生活者が日常でも困らない程度に日本語の能力を身につけることは、必要不可欠である。しかしまた、外国人にも理解しやすい「やさしい日本語」が求められているのも現実である。特に命の安全に関わるような**災害時の避難指示や、町内コミュニティでの情報回覧**などの際に、日本人の子どもでも主旨を理解できるようなやさしい言い回しが求められる。本講座では、望月優大『ふたつの日本 「移民国家」の本音と建前』(講談社現代新書)や庵功雄『やさしい日本語 多文化共生社会へ』(岩波新書)をテキストとして読み、日本語を使って生活している外国人に対して日本語をやさしく表現し直すことの意義について学んだ。

▶ 講座の様子と成果

【議論】 英国 BBC が制作した「移民の危機」シリーズのニュース動画も参考にしつつ、**コロナ危機の中で生活難に陥っている日本在住の外国人の現状を理解し、何が課題なのか**を共有するところから、本講座をスタートした。建設現場やコンビニエンスストアで働く外国人は、かつては国内の出稼ぎ者(首都圏であれば東北地方からの出稼ぎ労働者)たちが担っていた仕事に従事している。『ふたつの日本』は、「移民」が居ないとする建前と、実際には会社・企業が労働者を低賃金で酷使し搾取する本音との間で、外国人労働者が苦しんでいると指摘している。つまり、政府が政策として本音と建前を使い分けることで、**外国人に優しくない社会**が形成されてしまっているのである。事態の改善には、コミュニティの一員として外国人に接することや、日本語話者の外国人には一文にメッセージの分かりやすい文の構成で話すなどの工夫が要る。二つのテキストを併せて読むことで、多文化共生社会で実行可能な具体的なアクションを考えることができる。

講座内の議論では、外国人を蔑むヘイトスピーチの問題にも言及があり、「いつまでも外国人をよそ者扱いしては意味がない。多文化共生がただのスローガンにならないよう、外国人の生活・権利の保障もすべきではないか」との意見が出た。

【学びの成果・まとめ】 10月の講座には社会教育実習生(大学生)も参加し、グループワークを行った。彼からは、「社会人受講生の議論の厚みに圧倒された」というコメントがあった。その言葉どおり、本講座の後半では、暉峻淑子『豊かさとは何か』(岩波新書)やアマルティア・セン『人間の安全保障』(集英社新書)なども参照しながら、弱者に対してやさしい社会であることについて考え、また生活や命の安全保障としての「**人間の安全保障**」という概念についても学んだ。

講座のまとめとして「**やさしさとは何か**」というテーマで議論を行った。2021年3月に名古屋出入国在留管理局で起きた、スリランカ人女性ウィシュマさん死亡事件のことも話題に上がり、「外国人と日本人の間には「**人権格差**」と言ってよい状況がある」などという発言もあった。また、「日本で暮らす外国人に対しては、やさしい日本語を使うようにしたい」や「地域コミュニティこそ、外国人が日本語を学ぶ場であり同時に**居場所であることが望ましい**」という意見も出た。やさしさを心情で留めておくだけでは、やさしくない。**やさしさは行為を伴ってこそ、本当のやさしさとなる**。最後には、次年度の講座を「やさしさ」について考える内容にしてはどうかとの意見も出て、学びのテーマの継続と展開を確認することができた。





今、世界で起きていることを 多角的な視点で捉える

佐藤 壮広



▶ 講座のねらい

令和4年度の「読みを深める“この本カフェ”～いま、戦争を考える」講座のねらいは、

(1)表現力の向上と(2)戦争について理解を深めることの2点とした。



1
表現力
の向上

本講座では継続してこれを目的に掲げている。具体的には、受講生の中からブックレビューの書き手を育てることである。8年ほど前、豊島区立中央図書館スタッフとの相談のもと、同図書館の『図書館通信』(季刊)の中に、読者の読者による読者のための本の紹介コーナーとして「この本カフェ」という欄を創った。以来、本講座のマナビト生がその欄に文章を寄稿している。この「表現力の向上」の成果を可視化する場として、『図書館通信』の「この本カフェ」が役割を果たしているのである。



2
戦争
について
理解を深める

ウクライナとロシアとの間で戦闘が行われている情勢の中で、グローバルな課題としての「戦争」について考えることが必須だと考え、戦争に関する本を読むことにした。テキストとして選んだのは、科学者・アインシュタインと精神分析学者・フロイトの往復書簡『ひとはなぜ戦争をするのか』(講談社学術文庫)である。

▶ 講座の様子と成果

【議論】 往復書簡の中でフロイトは、戦争の主要因は人間の持つ「破壊欲動」にあると指摘し、戦争抑止の方法として「文化の力」の発動を提案している。またアインシュタインは、国際連合のような国際的で強力な力を持つ中央集権的組織が必要だと主張している。講座では、グループワークも交えつつこれらの主張をめぐる議論を重ねた。

グループワークから出た意見(一部)

90年も前の議論だが、今もその指摘は有効である。国際情勢は何も変わっていない

破壊欲動が無意識の行動だというのは厄介なことだ

現在の国際連合は常任理事国の意向が重視され、そのせいで国際関係が複雑に絡む戦争・紛争の解決や調停にはその役割を果たせていない

文化の力の発揮という主張はよいが、具体的にどのような文化のことを言っているのかについては、議論の余地がある

【体験の語り】 受講生の久保田 仁さん(としまコミュニティ大学歴10年)から直に戦争体験を聴くという機会を得たのが、本年度の講座の大きな成果、学びの一つである。久保田さんは終戦時、長春(新京)で暮らしていたという。終戦と同時に旧ソ連の兵士が進軍してきて、久保田さん自身や家族は銃口を向けられたとのこと。その緊張感は、当事者の語りだからこそ時間を超えて伝わってきた。また、引き揚げ船での食事の話や戦後の生活の苦勞の話は生々しく、戦後生まれの多い受講生にとっては「歴史」の語りを聴く機会となった。

【学びの成果・まとめ】 講座の最終課題として、戦争とそれを抑止する文化との関係について意見を300字でまとめてもらった。「精神文化としての日本の憲法9条には平和のビジョンとしての意義がある。」(沼田 篤)、「独裁者の登場を防ぐ政治・文化運動が必要だ。」(久保田 仁)、「まずは文化をリスペクトすべき。それが無いところに平和は訪れない。」(清水 厚敬)、「丸腰(非武装)では国は守れない。国際政治の中でどのように国と国民の生活を守るのか、これは難しい課題だ。」(浅井 久美子)、「教育の質を高めて“学力武装”(インテリジェンスを磨く)することが、自立した人間、自立した国家への方策だ。」(砂塚 寛子)など、多様な意見が出た。

時代に向き合う学びのテーマ選定と、活発な意見交換による思考の深まりは、としまコミュニティ大学・佐藤ゼミが目指してきたことである。本年度もまた、その成果を受講生と共有することができた。



戦争体験を語る様子

文責/
担当講師 佐藤壮広

山梨学院大学学習・教育開発センター特任准教授、立教大学文学部兼任講師、立教大学セカンドステージ大学講師。表現文化、沖縄研究。豊島区立中央図書館「図書館通信」本の紹介欄「この本カフェ」を企画・監修。豊島区在住。

異質な他者を知り、認め、お互いに歩み寄る多文化共生社会を希求し、その実現のため努力をしてみよう。**自発的な行動の積み重ね**が最終的には大きな変革を生みだせるのだ。

古川 依子

国連を中心とした多文化共生を図る多くの専門的組織機関、学問、文化の進展を**地道に図ることが**平和のために必要だ。

今川 茂

多文化共生を機能させるには、存在としての**マイノリティに目を向け**その対応は合っているか、結果は誤っていないか、という羅針盤を持つ文化を求め続けることだ。

谷津 行穂

普段からの**相手への理解**に努めれば戦争は回避出来ると思いたい。

岡本 圭司

多様な文化の存在を認め、その多様性を許容する**包容力**が大事。

仲地 弘文

SDGsを世界中が達成すれば、多文化共生が進めば、**戦争は消滅**する?!

酒井 一夫

すべての人々に**豊かな食べ物**が行き渡れば、争いは防げるのでしょうか。

小林 洋二

2023年を生きる私たちへの問いかけは、**平和への道**を考え続けること。

鎌田 和枝

世間(シンパシー)と社会(エンパシー)は**イコールではない**。

今井 久夫

多文化共生社会をキーワードとした



受講生の声



地球は、国同士は対峙していても、一緒に暮らす**宇宙ステーションのような世界**。

水埜 多喜子

正解は見つからないが、ディスカッションを通じて**自分の視野を広げていく**ことが大事。

渡邊 英信

誰もが弱者になる可能性がある。**やさしく生きる**ことは多文化共生社会の着地点。

清水 悦子

大人である私たちが、誰もが居心地の良い地域社会を作っていくために**意識を変えて**いかなければならない。

きたキョン

多文化共生を一步進めるには、生活をする上で欠かせない情報を、**弱い立場にある方にも伝えられる**こと。

内田 美津子

多文化共生社会とは、人種や国籍だけではなく、性別や障害など今まで有標とされてきた人たちも同じように**平等、公正**に送れる社会。

小湊 建侍

日本社会において、**誰もが努力をすれば報われる**社会を作る必要性。

薄井 重男

地域の中の居場所づくりの実現を考えたい。

辻 秀幸

ことばとコミュニケーションは、人間同士の団結に必要不可欠なもの。

辻 宏子